

Glocal Tenri



3

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.3 March 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
宗教研究における内と外
／井上 昭洋 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(4)
本連載における「翻訳」について ③
／加藤 匡人 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (12)
戦前台湾における現地人布教—斗六教会設立
／山西 弘朗 3
- ・ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (7)
新自由主義改革と社会福祉—社会福祉基礎構造改革とその影響—
／深谷 弘和 4
- ・ イスラームから見た世界 (23)
親から子へ信仰を伝えるということ—イスラームの宗教教育—①
／澤井 真 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (26)
6. コロンビアの日常4：家族の実態その4
／清水 直太郎 6
- ・ 図書紹介 (134)
太田登『啄木 我を愛する歌—発想と表現—』(八木書店、2022年)
／澤井 義次 7
- ・ 2022年度おやさと研究所特別講座「教
学と現代」のお知らせ 8

巻頭言

宗教研究における内と外

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

実証主義と解釈主義、エティック（第三者の客観的な視点）とイーミック（当事者の主観的な視点）、経験に近い概念と経験に遠い概念など、文化を理解する際の相対する2つの枠組みは、あえて1つのペア概念に要約するのなら、文化解釈における「インサイダー」と「アウトサイダー」の関係と捉えることができる。カナダの宗教学者である Noll 准教授の神学者に対する苛立ちは、インサイダーであることに無自覚な（もしくはアウトサイダーが存在することを感知しない）神学者に対するものであった。対象から離れて客観的に研究する宗教学者を自負する彼にとって、自分を生物学者だと勘違いしているカエルは許すことのできない存在であったのだ。

彼の理想とする宗教学は、文化人類学における上記の2つの枠組みの中で読み替えれば、エティックで経験に近い視点に立った宗教学であると言ってよいだろう。彼がそのような宗教学を目指すこと自体に問題はない。だが、彼の過ちは、戦略的にその立場を取るといよりも、その視点に固執し、それこそが科学であり学問であると考え、イーミックで経験に近い視点に立つ学識（彼にとっての「神学」）を主観的な非学問として見下してしまった点にある。しかし、解釈人類学が、経験に近い概念と経験に遠い概念の対立を乗り越え、そのどちらにも回収されない文化の解釈を目指すように、またネイティブ人類学が、同時にネイティブであり人類学者であることの困難性を克服しようとするように、信仰を持つ宗教研究者も自らの信仰する宗教を研究対象とする時、信仰者と研究者の対立を乗り越えて、宗教についてのより良い解釈を目指すべきであろう。この企てにおいて、宗教学者と神学者の別はないはずである。

おそらく、Noll 准教授の描く神学者像の極めて近い所にいる神学者は存在する。学

識としての神学を信仰世界の内側に留まらせ、その外側に向けての対話の可能性を夢想だにしない神学者はいるだろう。もちろん、ここでは他宗教とのエキュメニカルな対話のことを言っているのではない。宗教の内と外、インサイダーとアウトサイダーの対話のことである。その対話の可能性は、まず第一に、インサイダーの翻訳の努力にかかっている（「カエル語」で生物学者に話しかけても通じない）。それが、ネイティブ宗教学としての天理教学の再構築に向けての第一歩となる。

宗教研究の内と外の問題にあまりに無自覚な神学者に対して、Noll 准教授の苛立ちを幾分なりとも共有する者はいるはずだ。彼は、神学と宗教学を対比させ、アウトサイダーとして客観的に宗教にアプローチしようとした。少なくとも彼にとって、宗教についての学識に内と外があることは自明のことであった。しかし、残念ながら、宗教を理解しようとする際の内と外の間を生じる困難を克服しようとする態度に欠けていたのである。

ここまでの議論における「神学」を「天理教学」に読み替えれば、天理教学が抱える認識論的問題について考えるヒントになるだろう。ネイティブ宗教学として天理教学を再構築するために、信仰の内側にいる天理教の信仰者（ネイティブ）が信仰の外側にある学問（宗教学や文化人類学）を用いて、自らの宗教（天理教）にアプローチを試みてもよいかもしれない。自らの信仰を棚上げせずに、そのような作業を行うことには困難を伴うが、そこから内と外の対話を始めることができるだろう。ただし、学問としての天理教学と宗教学の間に横たわる問題と、信仰者と研究者の間に生じる認識論的問題は、互いに関係し合っているものの、ある程度区別して検討しなければならぬ。